

「岸樹病」について

日比野 浩 信

「喜撰式」に真偽両本の存していたことは、顕昭の「古今集序注」及び、定家の「長歌短歌説」によって知られており、久曾神昇先生は宮内庁書陵部所蔵の「新撰和歌髓脳」が喜撰偽式にあたるものであると推察されている。⁽²⁾細部についてはなお、再考察の余地が残されていると思われるが、顕昭が「古今集序注」で

仍俊成、範兼、清輔等引用之⁽³⁾

としているように、「俊頼髓脳」「和歌重蒙抄」「奥義抄」等が引用しているようであり、殊に「奥義抄」において「已上出喜撰式」と明記する箇所については、今日伝わる「喜撰式」と同文ではない。

「新撰和歌髓脳」のうち、「喜撰式」と重複する和歌四病と和歌八品は、それぞれ四病と和歌八階によるものであろうことをかつて考察した⁽⁴⁾。その際には問題としなかつた

が、「日本歌学大系」本によれば、四病のうち、その第一の病が「喜撰式」においては「岩樹」、「新撰和歌髓脳」においては「岸樹」とされており、両者に違いが認められる。真偽両「喜撰式」について指摘している顕昭、定家とも、この違いについては何の言及もしていない。

「岩」「岸」のたった一文字の違いではあるが、その名称に基づいた研究も発表されており、無視すべきではないと思われるので、未見の伝本があるなど不十分ではあるが、報告させていただく次第である。

結論から先に言えば、「岩樹病」とあるのは誤りで、「岸樹病」とあるのが正しいと考えたい。

一 「喜撰式」の諸写本

「喜撰式（和歌作式）」の諸本は、ほとんどが江戸時代の書写にかかるものようであり、最善本とすべき一本を特にあげるといふことはできない。よつて、数本を参照、校訂して本文を作成するのが妥当であると思われる。唯一の活字本である、「日本歌学大系」所収の「喜撰式」の本文は、

右以東京帝國大學藏本神宮文庫藏本前田家藏本竹柏園藏本等諸本校正畢

とされている。ある一本を底本として、他の本で校合した場合には

右以……本書寫、以……本校合畢

のような書き方がされている場合が多いところをみると、東大本、前田家本などによる校訂本文ではないかと考えられる。このうちいづれかの本に四病の第一の病を「岩樹」とするものがあつたのかもしれない。

これまでに管見に入ったのは、次の諸本である。

彰考館藏本（三本）、内閣文庫藏本（三本）書陵部藏本、
大阪市立図書館藏本、鶴見大学藏本、三手文庫藏本、
佐賀大学藏本、高山郷土館藏本、中央大学藏本、久保

田淳氏藏本、岐阜市立図書館藏本、ソウル大学藏本、
神宮文庫藏本（四本）、東京大学藏本

（以上、国文学研究資料館マイクロフィルム（以下、
マイクロとする）による。）

尊経閣文庫藏本、東京大学藏本、志香須賀文庫藏本
以上、計二十五本であるが、この中には「岩樹」となつて
いるものはなく、すべて「岸樹」と読めるものばかりであ
る。

大多数の伝本において一致するからといって、それによ
り正しいとすることはもちろんできないが、調査し得た「喜
撰式」諸本からは「岸樹」を否定する材料は見当たらず、
且つ「岩樹」を正しいとする論拠となるものもない。

「日本歌学大系」に明記されている四本の内、竹柏園本は
遺憾ながら未見であるが、仮に竹柏園本に「岩樹」とあり、
他にも「岩樹」とする伝本が存していたとしても、岸と岩
とは字形が全く似ていないわけではなく、またどちらも音
が「ガン」であるので一方を書写の際の誤りであるとする
ことができよう。

二 他の歌学書の引用

管見に入った他の歌学書の諸本は、次の通りである。^(註)

〔新撰和歌髓脳〕

書陵部蔵本（二本）（以上マイクロ） 歌学大系本

〔俊頼髓脳〕

内閣文庫蔵本（三本）、書陵部蔵本（二本） 彰考館蔵本（以上マイクロ）

志香須賀文庫蔵本（四本）、尊経閣文庫蔵本、続々群書類従本、歌学文庫本、歌学大系本、日本古典文学全集本

〔奥義抄〕

書陵部蔵本、内閣文庫蔵本（二本）、京都女子大学蔵本（以上マイクロ）

志香須賀文庫蔵本、大東急記念文庫蔵本、豊橋市立図書館蔵本、国立歴史民族博物館蔵本、慶安五年版本、歌学文庫本、歌学大系本

〔和歌童蒙抄〕

東京教育大学蔵本、書陵部蔵本、内閣文庫蔵本（二本）、刈谷図書館蔵本（以上マイクロ）

尊経閣文庫蔵本（原装影印版古辭叢刊）、志香須賀文庫蔵本、国文註釈全書本、歌学大系本

〔古来風躰抄〕

統群書類従本、歌学大系本（初撰本、再撰本） 歌論集（三弥井書店刊）本、岩波文庫本、日本古典文学全集本、

日本思想大系本

〔八雲御抄〕

北海道大学蔵本、東京教育大学蔵本、書陵部蔵本（二本）、内閣文庫蔵本、高松宮家本、蓬左文庫蔵本、名古屋大学蔵本、和歌山大学蔵本、三手文庫蔵本、祐徳神社蔵本、王立図書館蔵本（以上マイクロ）

〔校本八雲御抄とその研究〕所収本、歌学大系本（第三卷所収本、別巻四所収本）

〔和歌色葉〕

書陵部蔵本、内閣文庫蔵本（二本）、鳥根大学蔵本、河野信一記念館蔵本、熊本大学蔵本（以上マイクロ）

静嘉堂文庫蔵本（原装影印版古辭書叢刊）、上野本（和泉書院刊）、歌学文庫本、歌学大系本

これらもすべて例外なく「岸樹」としている。

中でも「古来風躰抄」初撰本では、「キシノウヘキ」との振り仮名さえ付されており、底本とされている穂久迺文庫本は、俊成自筆本を「触損まで精確に影寫してあ^る」るのである。また「新撰和歌髓脳」の奥書には

雖爲狼藉本為備文書如形所書置也
とあり、一本には

皇太后大夫^{俊一}真筆

とも記されている。もう一本には貼紙に「俊一卿筆」とさ

れており、俊成の筆跡まで忠実に模写するものであるようであり、俊成筆本の存^{（ま）}していることがわかる。これらによると、すくなくとも俊成は「岸樹」としてとらえていたことが知られる。ちなみに、俊成が「喜撰式」の真式・偽式のどちらを用いていたかは明らかにすることはできないが、もし俊成が偽式を用いていたならば、定家によって何らかの言及がなされてもよいように思われるが、それは行なわれていないようである。

「和歌色葉」は、作者上覚が、「喜撰式」真偽両式の存することを指摘した顕昭に、批評を請うているところから、もし仮に偽式に「岸樹」とあり、真式では「岩樹」としてあるのであれば、顕昭が気付かぬはずもなく、何の疑問も提示することなく

（前略）扇喜撰之風、追能因之跡、不堪感。愁加一篇。
難波津のそのくもりもあらかじかしかきあつめたる

きよき玉藻に

などと書き添えることは考え難い。「和歌色葉」は真式に拠っており、そこでも「岸樹」とされていたとみることができよう。

加えて、偽式とされる「新撰和歌髓脳」の四病は「喜撰式」に拠っているものであり、「風燭」「浪船」「落花」の三つの病の名称はそのままで「岸樹（岩樹）」のみを改名

したとは思われない。偽式に拠ったとみられる他の歌学書は言うまでもなく、真式に拠ったものについても同様のことがいえるであろう。

これらを考え合わせると、「喜撰式」真偽両式ともに、四病の第一の病は「岸樹」とされていた、といえるのではないだろうか。

三 現在の研究

現在の研究において、「岸樹（岩樹）」はどのように扱われているのだろうか。

まず、辞典などの類では、「日本古典文学大辞典」が「歌の病」の項に「岩樹」としてあげており、「和歌大辞典」は「喜撰式」の項に「岸樹」と記している。「研究資料日本文学」では、その「歌病」という記述のなかで「岩樹」としており、「日本古典文学全集」所収「歌論用語（歌病の項）」及び、「日本歌学大系」解題では「岸樹」とする。

このように基本的な参考文献においても「岩樹」として記載されている場合があり、何の疑問も抱かなければそのままの記述を鵜呑みにしてしまうことになりかねない。

「喜撰式」自体の研究は、それほど多くなされているとはいえないが、福井久蔵氏は「大日本歌学史」で

この書には三十一文字の中に四病があると立ててある。所謂四病といふのは第一岸樹、第二風燭、第三浪舟、第四落花である。名の原づくところは明かでないが、倒れ易いとか、消え易いとか、覆り易いとか、花片が散乱して醜いというやうな缺點によつて命じたものと思ふ。中に岸樹は

てる日さへ てらす月さへ

の如く第一句の初字と第二句の初字と同聲なるを指してゐる。

とされ、中島光風氏は「上世歌字の研究」で

四病といふのは岸樹（岩樹ともいふ）、風燭、浪船、

落花の四をいひ、（後略）

としておられる。小西甚一氏は「文鏡秘府論考」のなかに

○岩樹病

これは「第一句初字與第二句初字同聲也」といはれる。

明らかに詩病の平頭を模したものである。

てる日さへ てらす月さへ

を挙げ、下に「て興て同聲也」と注する。「八雲御抄」は第一句と第四句との頭字が同音なるを平頭病としてゐるが、それは短歌において上句と下句とをそれぞれ單位と見た故であろう。「石見女式」や「新撰和歌髓腦」は「岸樹」に作る。

と記しておられる。

最も詳細なものは、小沢正夫氏の御研究である。御著「古代歌学の形成」では次のように述べておられる。

『喜撰式』は歌病について

抑五七七七七、一文之中予有四病。

といつて、

岩樹 風燭 浪船、落花

の四病をあげている。これらを検討した結果を次にしるそう。

岩樹

てる日さへ てらす月さへ

のように、第一句の頭字と第二句の頭字とが同音になるのを病としたものである。「岩樹」は「石見女式」と「新撰和歌髓腦」とには「岸樹」に作つてゐるが、意味は恐らく岩上（または岸上）の樹木の意であろう。それがこの病の名前につけられたのは、初句と第二句との「て」という音のひどく目立つことを岩上に生えた二本の木にたとえたのもあろうか。それとも、第一章第三節でいったように「岩の上に根ざす松が枝」の混本歌から思いついたのであろうか。どちらにしてもそれほど明解とは思われない。なお、この病は一六の犯であるから、「平頭病」の一半である「水渾」に

当^(二)る。

また、「平安の和歌と歌学」においても

『喜撰式』では「岩樹」「風燭」「浪船」「落花」という和歌四病の名前が優美でいくらか難解ではあるが、大体六朝後期の詩文に見られる語であることが注意される。(中略)そして「岩樹」を除いた他の三つの語は、優美であると同時に、無常観的な気分をただよわせたものでもある^(三)。

としておられる。

福井氏の引用では「岸樹」を、中島氏の場合もむしろ「岸樹」を認めておられ、歌学大系によって「岩樹」の名もあげておられるようである。

問題とせねばならぬのは、小西氏、小沢氏の御論考である。

四 「岩樹」批判

一・二より、四病の第一の病は「岸樹」であり、「岩樹」ではないとすべきであろう。

「日本歌学大系」に「岩樹」と記されていたために誤られたまま受け入れられ、流布したのであろう。他に「喜撰式」の翻刻がなされていないのも一つの要因となっている

かもしれない。

この誤りの原因は何であろうか。「日本歌学大系」の解題には「岸樹」としてあることから、久曾神先生ご自身は「岸樹」として認識しておられたはずである。それを本文作成の段階で「岩樹」に改められたとは思われない。まして解題に「岸樹」とある以上「岩樹」とある伝本によって、これを正しいものとされたわけでもないであろう。あるいは、植字などの際のミスであろうか。判然としない。

さて、「岩樹」を認めておられる二氏の御論考について考えたい。

この病が詩病の「平頭病」と関連深いことと、「石見女式(小沢氏は『岩見女式』とされる)」「新撰和歌髓脳」では「岸樹」としている、とするところは、二氏に共通するところである。しかし、小西氏はこの病の名称については、取り立てて触れてはおられない。小沢氏の御論では次の二点が「岩樹」を認めておられる中心論拠となっているようである。

①六朝後期の詩文にみられること

②「岩の上に根ざす松が枝」の混本歌から思い付いたかと思われること

①の用例については「大漢和辞典」によっておられるが、意味は同じであるとはいえ、「嚴樹」は記されているもの

の「岩樹」としては見当たらない。ところが「大漢和辞典」には「岸樹」という言葉も載せていないようである。「文選索引」などの索引類などにも見出すことができなかった。

しかし、索引・辞書類に見当たらなかったからといって、「岸樹」の語が存在しなかったと決め付けることはできない。また用例があるからといってそれを四病第一の病と直接に結び付けられるものでもなからうと思われる。

②についてはあくまで御推察であろうが、確かに「喜撰式」には、

混本歌 失心人爲顯詠耳

いはのうへにねざす松がへと思ひしを
あさがほの夕かげまたずうつろへるかな二三

とある。しかし、この歌が「第一句の初めの字と第二句の初めの字が同じ」であるとする四病第一の病に適っているわけではなく、この点からもこれをもって「岩樹」であるとするには疑問が生じる。

では、内容的には「岩の上に根ざす松が枝」はどういったことを表しているのだろうか。「(人の心は)岩の上(が)つしりと)根ざす松のように(強く信じられるものであると)思っていたのに、朝顔が夕べを待つことなく萎んでしまう(かの)よう(には)かなくうつろいやすいものであるよ」といった意味のものであらうと思われる。

これは、朝顔のようなはかなさを強調するために、岩の上に生える松を対比としてあげたものであり、岩のわずかな隙間に深く根を食い込ませ、がつしりと岩を抱え込むように立つ松の木は、たくましく強固なものの例に他ならず、したがってこの歌においては、強弱の対照がなされているのであらう。

さて、「岸樹」はどうであらうか。岸に生えた木の意と考えて差し支えないであらうが、「岸の姫松幾代へぬらむ」のように、何十年もあるいは何百年も生き続けてきたものと感じられる使われ方も多い。しかし、

すみのえのきしのまつがねうちさらしよせくるなみの
おとのさやけさ二五

(万葉集 一一六三)

われのみやかげとはたのむ白波も絶えず立ちよる岸の
姫松

(貫之集 二八)

などでは、木の根元に波の打ち寄せる様が詠まれており、くづれゆくきしにおひたるまつよりもねさしてあやなき心ちこそすれ

(仲文集 六六)

世の中をなにしたとへん水はやみかつくづれゆくきし
のひめ松

などでは、波に浸食され崩れてゆく岸に生えている、いつ倒されることになるやもしれぬ松の危うさ、はかなさを詠み込んだものとみられるのではないだろうか。

「岸樹」はあくまでも四病の内の一つの名称であり、他の三つの病と同じ観点から命名されたものと考えるべきであると思われる。

福井氏はただ「倒れ易い」などの「缺點」からの命名とされたのであるが、小沢氏は「岩樹」を除いた他の三つの語は、優美であると同時に、無常観的な気分をただよわせたものでもある。」と記しておられ、「岸樹」であれば、四病のすべての名称が、優美であると共に、無常観的な気分を漂わせるものとすることができることになり、また、
仏教的無常思想に興味を抱いた文人の手すざびとして
作られたのが本書であるという程度には考えられるだろう。

という氏の御推察をも、多少なりとも体系付けるとともに、補強し得ることになるのではなからうか。

五 結語

四病の第一の病の名称は、「岸樹」であって「岩樹」で

はなからう。

「喜撰式」諸写本及び、他の歌学書からそれを知ることができる。また、「岸樹」とすることにより、四病の各々の名称を体系的にとらえることができるはずである。「岩樹」とあるのは、恐らくは「日本歌学大系」の植字などの際の誤りと思われるが明らかではない。もし仮に、「岩樹」とする伝本が存在したとしても、「新撰和歌髓腦」その他の歌学書の成立を遡る平安中後期以前のものであればともかく、それ以後の書写にかかるものであるならば、誤写であるとしてよいと思われる。「日本歌学大系」及び、これに拠って「岩樹」とするものについては、訂正すべきではなからうかと思われるのである。

(一)「文學」(第四卷第一號、及び第五卷第六號)

(二)「日本歌学大系」別四、一三五頁

(三)「愛知大学國文學」第三十號「新撰和歌髓腦について」

(四) 活字本の底本となっているものも管見に触れたものについて
いはあげ、また活字本は、同一底本によるものもそのままあげた。

(五)「日本歌学大系」二解題

また、平成三年十一月、蒲都市博物館において開催された「藤原俊成の古典」において、「古来風躰抄」俊成自筆

本およびその転写本である穂久迹文庫本も展示されており、蝕損をも精写していることを確認することができた。同展図録八頁にカラー図版が掲載されており、これによっても確認できる。

(六) 「日本歌学大系」一、解題

(七) 「日本歌学大系」三、二六七頁

(八) 一一頁、一二頁

(九) 一六七頁

(一〇) 研究篇下、八三頁

(一一) 四〇五頁

(一二) 二二二頁

(一三) 「日本歌学大系」一、二〇頁

(一四) 「古今和歌集」九〇五

我見てもひさしく成りぬ住の江の岸の姫松いくよへぬら
む

(二五) 以下、和歌の引用は「新編国歌大観」による。

(二六) (一一) に同じ

蔵書の閲覧を快諾下さった、久曾神先生、尊経閣文庫、東京大学図書館、その他諸機関に感謝申し上げます。

(大学院博士前期課程二年)